

## Special Essay

### 図書館でコーヒーを！

薬理学 西 昭徳

最近図書館から足が遠のいたように思う。ジャーナルの電子化が進み、図書館に行く必然性がなくなったからである。電子化されていない古い論文をコピーする時に仕方なく図書館に行くというのが実情である。

文献検索で PubMed が無料で利用できるようになったのは、わずか10年ほど前のことだろうか。その後、ジャーナルの電子化が順調に進んでいる。アクセス権さえあれば、研究室から最新の論文をダウンロードできる。以前は、新しいナンバーの印刷版が船便で届くまで1ヶ月も2ヶ月もかかり、論文が届いた頃には読みたいという意欲はなくなっていた。現在は、論文として公表されるレベルの新しい情報は、ニューヨークであろうが、クルメであろうが、同時に手にすることができる。まさに、情報のグローバル化である。

ジャーナルのアクセス権は、今のところ大学や研究所単位で契約されることが多いようである。図書館にはアクセス権の窓口としての役割が期待される。しかし、大学や研究所が契約する必然性はない。例えば、多くの専門分野のジャーナルにアクセス権を得ようと思えば、各分野の学会が契約窓口でもよいだろう。また、ほとんどの研究は公的な税金を使い行われている。その成果や情報を利用するために出版社に高額の代金を支払うことの矛盾が指摘されている。実際、2003年に非営利組織である Public Library of Science (PLoS; <http://www.plos.org/>) より PLoS Biology が刊行されて以来、PLoS や BioMed Central (<http://www.biomedcentral.com/home/>) などからオープンアクセスを基本としたジャーナルが次々と刊行されている。しかも、PLoS Biology のインパクトファクターは13.9であり、論文の質は高い。

では、これから先、図書館には何をするために足を運ぶことにしようか。診療あるいは研究の合間に、コーヒー片手にくつろぎながら本を読みたい時に足を運びたいものだ。売り物の本だってコーヒー片手に読める時代である。久留米大学の本であればコーヒーくらいよさそうである。そういえば、ロックフェラー大学の図書館では、大学のベテラン教授によるセミナー（コーヒーとクッキーつき）が開かれていた。

確かに、図書館はセミナーサロンとしても魅力的なスペースである。

